

国際化の中の日本語教育 ④

日本語教育文法

一般的に「文法」、あるいは「グラマー」という言葉を耳にしたら、「難解な、ややこしい、できれば避けたい」というようなイメージを持つ人も多いのではないだろうか。筆者も学生時代はそうであった。しかし、日本語教育文法というものに出会ってからは「目から鱗が落ちる」ように、わかりやすく理に適ったものだった経験がある。また日本語教師養成関係の授業を担当するようになってからも受講者から、「わかりやすい、どうして学校の国語の授業でこのように教えてくれなかったのだろう」という意見をもらったこともある。

具体的な例を挙げれば「未然、連用、終止、連体、假定、命令」などの活用や「五段活用、一段活用、」さらには「サ行変格活用動詞、カ行変格活用動詞」など品詞名も覚えさせられるような経験があったと思うが、うんざりした人も多いのではないだろうか。上に挙げた「未然、連用、終止、連体、假定、命令」を五段活用動詞の「読む」を例にすれば「読まない、読みます、読む、読めば、読もう」となるが、下線に注目すると、「ま・み・む・め・も」になっていることがわかる。これを「ない形、ます形、辞書形、假定形、意向形」のようにわかりやすい名称に変えて、「読まない、読みます、読む、読めば、読もう」と5つの形があるとすることで理解しやすくなる。さらにこの規則を「食べる」を例にすれば「食べない、食べます、食べる、食べれば、食べよう」のように活用が一段しかないとわかる。つまり「食べる」は一段活用動詞である。「サ行変格活用動詞」は動詞の「する」のことで、「カ行変格活用動詞」は「来る」のことでシンプルに説明し、「する」と「来る」だけ活用の形が特別で、たくさんある動詞の中でグループが違っていると説明するだけでも学習者の負担はかなり軽減される。「なんだ、そんなシンプルなことを難しく教えられていたのか」と思う人もいるかもしれない。しかし、日本人の日本語は自然に身に着いて文法を意識せずに運用している第一言語であり、外国人の日本語は文法を意識しながら習った第二言語であり、大きな違いがある。日本人はすでに身につけて無意識に使っている日本語をさらに磨きをかけるために国語の勉強をしているのだとも言える。そこから文法に関する考え方も「国語教育」と「日本語教育」とでは違いが出てくるのかとも言える。

日本語が運用できるレベルまで

縫部義憲編著『多文化共生時代の日本語教育』（渚々社、2002年）の「文法・文型の指導」の章で、関正昭は「日本語教育文法の勝負どころは外国人にとって難しい文法的意味や機能・用法をいかに的確に理解させ、運用の段階まで導けるかにあるのです。」(95頁)と述べているが、筆者も全く同じ思いである。往々にして日本語教師は文法的意味や機能・用法について辞書や文法書などを丹念に調べ上げ、教案に書き込み、学習者にもわかりやすいように既習の言葉に置き換えたりして“解説”に力を入れてしまうことがある。教師が正確に意味や機能・用法を把握することはもちろん重要なことだが、問題はそこから先で、学習者がそれを“運用”できるようにしなければ意味がない。日本語を使ってコミュニケーションが取れるよ

うになりたいのは学習者であり、教師のわかりやすい上手な解説を聞くのが目的ではない。日本語教師は今まで空気のように意識したことなく使っている日本語の文法的意味や機能・用法を意識して調べなければならず、教案を作る際にかなり時間を費やしてしまう。最近は参考書や教案集のようなものも出てきて、楽にはなっているとは思いますが、やはり丁寧に調べて自分の言葉やスタイルで教案を準備しなければならない。

あなたならどう答える？

日本が多文化共生時代に入り、日本語教育も多様化している現在、仕事として日本語教師をやっている人だけでなく、日常的に外国人に日本語を教える機会が増えるかもしれない。あるいは外国人から日本語について質問される機会もあるかもしれない。筆者は日本語教員養成の授業で「外国人が日本人によくする質問」を紹介している。パワーポイントでスクリーンに質問を映し出し、もし、このような質問を受けたらどう答えるかといくつかの例を出している。「『友達に会う』と『友達と会う』は同じですか。」「『行きたいです』と『行きたいんです』はどう違いますか。」などと提示し、まずは考えてみて、わからなければ隣の人と相談して、答えを考えるように指示している。教室の中がざわつくが、一生懸命考えてくれる。そんなことを考えたことがないという受講者もいれば、同じじゃないかと答える受講者もいる。全く意識したことがない部分を突かれたように皆、答えようがないと困っている受講生もいる。答えに関しては長くなるので割愛するが、日本語学習者からは様々な質問が来る。ベテランの日本語教師でも即答できず、「次の授業までによく調べて答えますね。」というように簡単には答えられないことを聞いてくることもある。今後、多文化共生時代で外国人が生活の中で日本語や日本文化について質問する機会が増えるかもしれない。当たり前が当たり前ではなく、丁寧に考えて答えなければならぬことも起こり得る。

グローバルな日本語文法

『多文化共生時代の日本語教育』の「日本語教育用文法用語」の解説の中で、関正昭は次のように述べている。

今後、日本語教育が盛んになればなるほど外国人学習者には広く用いられていくことになるでしょう。ただ、それが外国人のためだけの日本語教育用文法用語にとどまってはならないと思います。これからはボランティア活動による日本語教室など草の根的な日本語教育の需要もますます高まっていくものと思われます。その中で、できるだけ多くの日本人が日本語教育用文法用語を知り、日本語学習の難しさとおもしろさを外国人と共有できるようになれば、現状ではまだ十分に市民権を得られていない「日本語教育文法」もグローバルな「日本語文法」として認知される日が遠からずやってくるのではないかと期待しています。(109頁)

日本語教育文法は外国人のためだけでないという意見に、筆者も賛成である。それは日本人にとっても学びやすく便利なものである。どの国の人も分け隔てなく理解できるというところに、もしかしたら人間が互いに立て合い、助け合って暮らしていくことができる大きなヒントがあるように思うのである。